

日本中世英語英文学会東支部  
第35回 研究発表会 プログラム

- 開催日 2019年6月15日(土)  
■ 会場 明治大学 駿河台キャンパス リバティタワー  
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
開催校連絡先 TEL 03-5300-1319 (石黒太郎研究室)

- 受付 [13:30-16:30] リバティタワー13階
- 開会式 [14:30-14:45] リバティタワー13階 1134教室 (司会) 小山工業高等専門学校 岡田 晃  
日本中世英語英文学会会長挨拶…………… 東京大学 寺澤 盾  
日本中世英語英文学会事務局長報告…………… 慶應義塾大学 堀田 隆一  
開催校案内…………… 明治大学 石黒 太郎
- 研究発表 [14:50-16:40] リバティタワー13階 1134教室
  - 1. [14:50-15:20] (司会) 至学館大学 長谷川 千春  
*Le Morte d'Arthur* の英雄—*Harry Potter* に受け継がれるイメージ  
…………… 日本大学非常勤講師 小川 佳奈
  - 2. [15:25-15:55] (司会) 明治大学 石黒 太郎  
『ピーターバラ年代記』における動詞補文の選択について…………… 慶應義塾大学大学院 森田 真登  
(休憩 [15:55-16:10])
  - 3. [16:10-16:40] (司会) 早稲田大学 新川 清治  
古英語勸誘表現に伴う V1 語順…………… 明治大学 海田 皓介
- 東支部総会 [16:40-17:00] リバティタワー13階 1134教室 (司会) 北里大学 和治元 義博  
事務局報告他…………… 東京未来大学 宅間 雅哉  
会計報告…………… 明治大学 石黒 太郎  
会計監査報告…………… 日本大学 杉藤 久志
- 閉会の辞 [17:00-17:05] リバティタワー13階 1134教室…………… 明治大学 狩野 晃一
- 懇親会 [17:30-19:00] 会場: アカデミーコモン1階「カフェ・パンセ」

■ 注意事項

- 会場への交通および建物の配置については、同封の案内図をご覧ください。
- 受付は、リバティタワー13階です。
- 支部会費(一般 2,000円、非常勤講師、退職者、学生・大学院生 1,000円)の納入につきましては、受付でご確認ください。会費未納の方は、受付で申し受けます。当日のみ参加の方は、当日会員会費として500円を申し受けます。
- 会員、発表者、司会者の控室は、リバティタワー13階 1135教室です。
- 大学の教室運営の関係上、会場および控室の開場は13時30分頃の予定です。何とぞご理解のほどお願いいたします。
- 喫煙は構内の所定の場所をお願いいたします。
- 懇親会費(学生・大学院生 3,000円、それ以外の方は 5,000円)は、当日受付でお納めください。
- 乗用車での来場はご遠慮ください。

日本中世英語英文学会東支部 [事務局]

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12 東京未来大学 宅間雅哉研究室内

Tel: 03-5813-2525 (代)

## < 研究発表要旨 >

### 研究発表 1 *Le Morte d'Arthur* の英雄—*Harry Potter* に受け継がれるイメージ

小川 佳奈 (日本大学非常勤講師)

司会 長谷川 千春 (至学館大学)

本発表では Thomas Malory (c. 1415-71) が *Le Morte d'Arthur* (1469-70) で描いた英雄のイメージがどのようなものかを明らかにした上で、そのイメージが現代の児童文学作品に英雄の表象として受け継がれていることを、J. K. Rowling (1965- ) 作 *Harry Potter* シリーズ (1997-2007) をその例として挙げて証明する。

Malory は *Le Morte d'Arthur* を執筆する際、ただ純粹に典拠となったフランス語の作品群を英訳して物語を繋ぎ合わせたのみならず、彼が創作した人物や挿話を物語に取り入れた。*Le Morte d'Arthur* にはブリテン島及びフランスで伝承されてきたアーサー王伝説の要素と、Malory 独自の物語の要素が共存しているといえる。その結果、*Le Morte d'Arthur* では、大別して 4 つの主題が語られることとなった。すなわち、少年 Arthur の England の王としての成長、Lancelot や Tristram を筆頭とした円卓の騎士達の冒険、聖杯探求、Mordred の陰謀によって引き起こされる Arthur の最後の戦いと死である。これらの主題が語られるなかで、Arthur は一国を統一して平和をもたらす、神に選ばれた王として描かれる。また、聖杯探求では世で最も優れた騎士として Galahad が登場し、円卓の騎士達の悲願である聖杯探求を達成する。Arthur は中世封建社会のなかで、また Galahad はキリスト教世界のなかで、それぞれの社会における偉業を達成する英雄である。

Malory は両者の英雄性を示すために、抜き身の剣を引き抜くという行為を用いる。各主題を扱う物語の冒頭で、他の誰にも引き抜くことができない剣を Arthur または Galahad のみが引き抜くことにより、彼らが物語のなかでも、特に偉業を果たす英雄であることが示される。本発表では、剣を引き抜いた後の Arthur と Galahad の行動を分析することで、Malory の思い描く英雄のイメージを明らかにする。

さらに本発表では、Malory の描く Arthur と Galahad が、英雄の表象として現代の英国児童文学にも現れていることを証明する。児童文学作品として世界的なベストセラーである *Harry Potter* シリーズの主人公 Harry は魔法使いであるが、Rowling が Harry に Arthur や Galahad のイメージを投影していることを、Harry の生い立ちや彼と the sword of Gryffindor との繋がりから明らかにする。さらに、the sword of Gryffindor を引き抜く行為を通して、Rowling が Harry のみならずその同級生である Neville と Ron も英雄として描いていることを明らかにする。

### 研究発表 2 『ピーターバラ年代記』における動詞補文の選択について

森田 真登 (慶應義塾大学大学院)

司会 石黒 太郎 (明治大学)

英語史において、動詞の取りうる補文 (Complement) は、通時的に変化してきた。Rohdenburg (2006) は、こうした動詞補文の通時的変化を「大補文推移」(Great Complement Shift) と名付けており、近年この分野への関心は高まってきている。本発表は後期古英語から初期中英語に焦点を当て、この過渡期における動詞補文の選択に関して『ピーターバラ年代記』を用い調査を行う。この年代記は後期古英語から初期中英語の言語を伝え

る貴重な資料として様々な研究に用いられてきたが、動詞補文という観点からの調査はこれまで十分に為されていない。本発表では、作品中に用いられている動詞とその補文を網羅的に調査した上で、動詞補文の選択についての考察を行う。

個々の動詞を詳細に観察すると、たとえ似通った意味を持つ動詞であっても、動詞補文の選択は単語ごとに異なる場合もあることが分かる。例えば、年代記で用いられている「させる」といった使役的意味を持つ動詞を比較すると、動詞補文は必ずしも同じタイプを取るわけではなく、*laetan* や *hatan* は主に原形不定詞と共起する一方で、*biddan*, *beodan*, *bebeodan* といった動詞は主に *that* 節と用いられていた。*don* に関しては比較的頻度は少ないものの、*that* 節、*to* 不定詞、原形不定詞のいずれとも共起していた。

*that* 節補文に関しては、現代英語では *that* 節と共起しない動詞であっても、本年代記中では *that* 節と用いられている様子も観察される。また、主に中英語の後半から近代英語にかけて特に *to* 不定詞補文の増加が観察されるとされているが、むしろそのような大変化に先立つ時代である後期古英語から初期中英語にかけて書かれた本作品において、*to* 不定詞補文がどのように用いられているのかについても考察を行う。

### 研究発表 3 古英語勧誘表現に伴う V1 語順

海田 皓介 (明治大学)

司会 新川 清治 (早稲田大学)

英語における動詞・助動詞構文の歴史は、豊富な語形変化体系を有する本動詞による総合的構造 (synthetic structure) から助動詞+不定詞を用いる複合的手段により文法機能を表す分析的構造 (analytic structure) への変化と一般に記述される。こうした分析的手段の発達は長年の国内外の諸研究により多数議論されている。また英語の歴史においては平叙文、疑問文や主節、従属節といった各タイプの文における主語・動詞・目的語などの文要素の語順変化も重要な研究テーマとなっている。

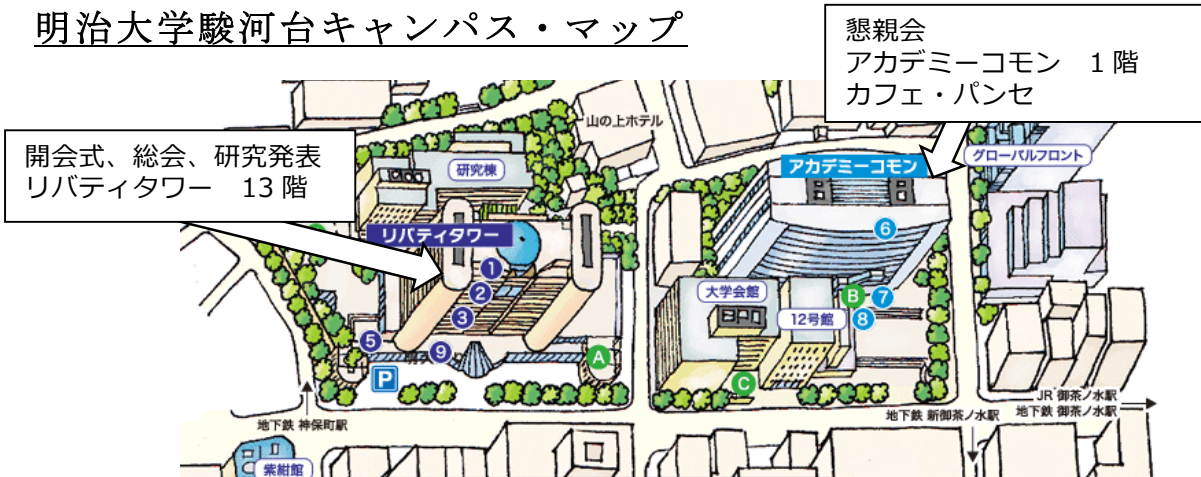
上記二点の変化の両方に関与する語法として、勧誘表現 (Adhortative expression) がある。これは現代英語で端的に言えば助動詞 *Let's* (<*Let us*) を文頭に立て、それに不定詞が後続する形を取る平叙文で、話者が聞き手にある行為を共に実行するように呼びかける機能を持つ。現代英語において勧誘を表す形式は通例この *Let's* + 不定詞のみであるが、英語の歴史上、古英語 (700–1100 年) と中英語 (1100–1500 年) では (i) 本動詞 + 人称代名詞 *we*, (ii) 助動詞 *Uton* + 人称代名詞 *we* + 不定詞、そして (iii) 助動詞 *Let* + 人称代名詞 *us* (後に *Let's*) + 不定詞が存在する。いずれも定動詞 (本動詞・助動詞) が文頭に置かれる語順 (本発表では V1 語順と呼ぶ。なお、V は 'verb' を、1 は 'first' を意味する) に基づくものであり、助動詞による分析的形式の発達、また定動詞が平叙文の第一成分にある特殊な語順の発生という意味で、歴史言語学的に重要な研究主体であると言える。一方英語と同系の現代ドイツ語における勧誘表現には、(i) 本動詞 + 人称代名詞 *wir* ('we'), (ii) 助動詞 *Wollen* ('will') + 人称代名詞 *wir* + 不定詞 (なお *wollen* と *wir* の語順は入れ替わることもある)、そして (iii) 助動詞 *Lasst* ('let') + 人称代名詞 *uns* ('us') + 不定詞があり、*Let's* + 不定詞のみによる現代英語の語法とは対照的である。こうした観察からも、英語とドイツ語は言語系統こそ同じであれ、歴史的变化の度合いが相違することがわかる。

本発表では *Dictionary of Old English Web Corpus* (Healey, Wilkin, & Xiang, eds. Toronto: Dictionary of Old English Project, 2009) を用いて、定動詞 (本動詞・助動詞) と *we* が倒置された V1 語順を調査し、古英語において次の二つの局面での変化が勧誘表現に見られる

ことを提示する。まず形態的レベルでは、本動詞の接続法形が元来勧誘表現を担っていたが、直説法と接続法の形態的区別が曖昧となり、勧誘の概念を明示するために助動詞による表現形式の出現が求められる。また統語的レベルでは、古英語において V1 語順が通常の主語+定動詞の語順と機能の面で区別がつかなくなりつつある中で、命題の内容が文脈的に重要である箇所では話題化 (topicalisation) の一環として勧誘表現の V1 語順が用いられる。

本発表ではこれらの点につき、古英語の語法をゲルマン諸語のそれと比較しつつ議論する。古英語に見られる現象が、他のゲルマン語にも共通して見られる現象かどうかを検討する言語比較的方法論により、英語の語法変化が持つ特徴を見出すことを目指す。

# 明治大学駿河台キャンパス・マップ



## 交通アクセスマップ

最寄り駅からのアクセス：

- JR中央線・総武線／御茶ノ水駅（駅番号：JC03・JB18）下車徒歩約3分
- 東京メトロ丸の内線／御茶ノ水駅（駅番号：M20）下車徒歩約3分
- 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅（駅番号：C12）下車徒歩約5分
- 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅（駅番号：I10・S06・Z07）下車徒歩約5分

